

# 今日も今日とてあまのじゃく

2025年第1号(通算第23号) 「ぼく、という存在①」

学習塾アイデア 塾長エッセイ

2025年1月25日 記

2023年11月18日、第22号をもって無期限の休止となった塾長エッセイを再開することにした。改めて世に訴えたい何かが生えたわけではない。アイデアのホームページを活性化すべく外部にその運営を委託した一環で、「塾の考えを知ってもらうためにエッセイと通信を再開しましょう」という話になったのだ。僕自身、文章を書くことは好きなので、もう一度チャレンジしてみようと思った。

さて、あつという間にお正月も過ぎ去り1月も下旬を迎えたが、今年も年末年始は帰省することができた。親不孝な僕は、帰省の一番の理由が両親や親戚に顔を見せることではなく、友人たちと一晩飲み明かすことにある。地元で農業を継いだ者、首都圏で研究職に就いた者、Uターンして地元で起業した者、職人として親に弟子入りして数年前に建設会社を継いだ者など、様々な人生を歩んでいる故郷の友人たちと会えるのは、もはや年に一度、年末年始の機会しかなくなった。

今年の話は、もっぱら「母校の閉校」だった。僕たちが在学していた頃の母校の小学校は、全校児童300名弱の町の中核校だったが、いまや全校児童は数十名。今年3月に閉校し、中学校と校舎が一緒の義務教育学校となるとのことで、複雑な感情を抱えつつ、小学生時代の話で盛り上がった。

この日集まった仲間はみな5年・6年のクラスが同じだった。すでに鬼籍に入られたが、6年生時の担任の先生は広島出身で、ある日、クラスで原爆写真集を見せてくれた。強烈な写真の数々に、涙ぐむ女子たちもいる中、先生は「この写真集から目を逸らすなら、あなたたちは将来同じことを繰り返します。だから、直視しなければなりません」とおっしゃった。それから、僕の中に「戦争とは何か」という問いが生まれ、それが人類の過去への関心に繋がった。実は僕の専門は社会科、もっと狭い範囲で言うと日本史なのだが、専門教科を決めるにあたり、この出来事が大きなきっかけのひとつになった。

一方で、小学卒業時で身長178cm、体重80kgと体格に恵まれていた僕は、町内唯一のスポーツ系少年団である野球を小学2年生の時から始めていた。体格に恵まれていたから、打っては柵を越え、投げれば120mの遠投をこなせた僕は、6年生時に全道大会に出場し、管内大会で優勝、優秀選手にも選んでもらった。

こうして、歴史好きで野球が取り柄の少年が出来上がったのだが、中学・高校と進むにつれ、当然のこと周りの選手たちの体格も育ってくるから、その優位性はいつの間にか消え、さらには高校1年生の時にインピンジメント症候群(いわゆる野球肩)になり、毎週ブロック注射をすることでなんとか肩が上がるという状況になり、僕の中で取り柄である野球が消えていった。残ったのは、歴史好きだけである。

幸運なことに、それまで博物館が無かった我が故郷に、平成8年、明治期にこの地を開拓した屯田兵をメインテーマとする郷土博物館が建設された。父が町役場の建設課で建築士をしていたことから、この博物館の設計に関わっていたこともあり、僕にとっては歴史を学べる特別な場所となった。学芸員の先生は、地球環境科学がご専門で、特に開拓期の風土病について研究されていた。肩を壊した頃から、僕は部活の合間にこの博物館に通うようになった。学芸員の先生にくっついて勉強するうちに、歴史博物館の可能性について関心を持ち始めた。加えて、高校3年生の春、当時学年主任で地理歴史科の先生が、「君は博物館で勉強しているんだから、博物館授業を企画してみなさい」という話をくれた。学年の博物館での授業を、生徒である僕に企画させてくれたのである。困った僕は、この先生に「教育とは何か」を問うた。先生は、「ヒトが人になる営みである」という、当時の僕には訳のわからない返答をくれた。それでも僕はその返答をヒントにして、「戦争当時の生の話を、当時を生きた人たちから聞く」という内容を捻り出し、博物館を会場に、戦争当時の資料をもとに、当時を生きた人たちに学年全員でお話を伺った。この時話しをしてくれたおじいちゃん、おばあちゃんとの交流は卒業まで続き、卒業式へ招待し出席いただくことで完結した。

僕は、母が高校教員として同じ学校に赴任していたこともあり、「学校」というものに反抗的だった。だから、教員になるつもりは毛頭なかった。それでも学芸員の先生の、「博物館の機能を学校でどう活かすかの研究をしてみたらいい」という言葉とこの博物館授業の経験が決定打となり、大学への進学を決意した。志望校は学芸員の先生の母校、北海道大学に定めた。なんとそれが、高校3年生の7月であった。(つづく)